

令和3年度第5回紋別市総合教育会議録

- 1 日 時 令和3年11月18日（木）午後3時00分～午後4時12分
- 2 場 所 紋別市役所 庁議室
- 3 出席者
- | | |
|------------------|-------|
| 紋別市長 | 宮川良一 |
| 紋別市教育委員会教育長 | 堀籠康行 |
| 紋別市教育委員会教育長職務代理者 | 小林正男 |
| 紋別市教育委員会委員 | 上林善證 |
| 紋別市教育委員会委員 | 渡邊孝博 |
| 紋別市教育委員会委員 | 古屋真由美 |
- 4 構成員以外の出席者
- | | |
|------------------------|------------------|
| 総務部企画調整課長 | 竹本幸孝 |
| 適応指導教室指導員 | 榎本朋子 |
| スクールカウンセラー | 寺崎真一郎(遠隔システムで出席) |
| スクールソーシャルワーカー | 尾崎仁美 |
| スクールソーシャルワーカー | 内田梓 |
| 中高生のためのオープンスペースUTRILLO | 大橋ひかる |
- 5 事務局関係
- | | |
|------------|------|
| 教育部長 | 佐藤健吾 |
| 学務課長 | 仲条憲明 |
| 学務課指導主事 | 綾部雅一 |
| 教育支援アドバイザー | 後藤淳一 |
| 学務課庶務係長 | 米田晃 |
- 6 協議内容 (1) 不登校について

令和3年度 第5回紋別市総合教育会議 午後3時00分開会

○宮川市長

定刻になりましたので、令和3年度第5回紋別市総合教育会議を開催いたします。進行につきましては、私が務めさせていただきます。

それでは、次第に基づいて、本日の協議に入らせていただきます。

本日は、「不登校について」を協議事項としております。総合教育会議設置要綱第6条において、総合教育会議は原則公開としておりますが、「個人の秘密を保つため必要があると認めるとき、会議の公正が害されるおそれがあるとき、又はその他公益上必要があると認めるときは、非公開とすることができる」となっております。

本日の協議事項には、非公開とすべき協議事項であるため、非公開としてよろしいでしょうか。

○各委員

異議なし

○宮川市長

それでは、そのようにさせていただきます。協議事項（1）不登校について、事務局から説明をお願いします。

○仲条学務課長

それでは、協議事項（1）不登校について説明させていただきます。

紋別市総合教育会議設置要綱の規定におきまして、「協議等を行うに当たって必要があると認めるときは、関係者又は学識経験を有する者から、当該協議等に関する意見を聴くことができる。」と規定されております。本日の総合教育会議には、不登校児童生徒に関わる現場の先生方にお越しいただきました。本日は、それぞれの現場での状況についてお話しいただきます。先生方にお話しいただいた後、質疑応答の時間を取らせていただきます。質疑応答が終わりましたら、現場の方々にはご退席いただきまして、総合教育協議において協議いただきますのでよろしくをお願いします。

それでは、初めに本市の不登校児童生徒に対する取組について、私の方から説明させていただきます。

紋別市では、小中学校に在籍する学校不適応児童生徒に対しまして、教育相談・個別及び集団活動を通して自立心を養い、社会性を身に付け、集団生活への適応を促し学校復帰を援助するために、平成14年度より適応指導教室、通称「ふれ

あい教室」を設置しております。また、平成25年度からは、道の「スクールカウンセラー活用事業」を活用いたしまして、児童生徒へのカウンセリング、教員・補助者への助言、児童生徒の心の悩みの深刻化やいじめ・不登校の問題行動未然防止、早期発見・早期対応を図ることを目的に、スクールカウンセラーを配置しております。令和2年度からは、いじめ・不登校など生徒指導上の課題に対応をするため、教育分野に関する知識に加えまして、社会福祉等の専門的な知識・技術を用いて、児童生徒のおかれた様々な環境に働きかけ支援を行い、教育相談を充実させるために、スクールソーシャルワーカーを配置し、不登校児童生徒への対応を行ってきているところであります。

以上で、市の不登校児童生徒に対する取組についての説明を終わります。

次に、紋別市の不登校児童生徒の背景について、後藤教育支援アドバイザーより説明いただきます。後藤先生、よろしく申し上げます。

○後藤教育支援アドバイザー

それでは、不登校につきまして、大きく1つ目は、小中学校における不登校の状況について、二つ目は、不登校児童生徒への支援について説明させていただきます。

まず、小中学校における不登校の状況についてですが、紋別市の平成27年度からの学年別不登校児童生徒数の推移をグラフに表しました。年度によって増減はありますが、全体的に見ますと、全国平均と同様、年々増加傾向にあります。

紋別市の令和2年度の不登校の要因ですが、全国と同様、無気力・不安が最も多いです。家庭環境や学校環境の変化や本人の生活の乱れなどにより、何となく登校しない、体調不良を訴え登校できないなど、無気力・不安の状態になると考えられます。

次に、不登校児童生徒への支援についてです。初めに、紋別市における不登校児童生徒への支援の取組状況についてです。5点あります。

一つ目は、毎月、教育支援アドバイザーが各学校を訪問し、いじめ・不登校・問題行動について情報を共有しています。報告を受けて、今後の対応について協議しています。また、各学校に共通の不登校児童生徒支援シートを作成してもらっています。中学校卒業まで活用できるようにしていますので、中学校への引き継ぎや、支援計画等に活かせるようにしています。

二つ目は、適応指導教室の運営です。学習の機会を確保するとともに、生活習慣の改善、コミュニケーション能力の育成を図り、学校復帰へつなげることをねらいとしています。

三つ目は、要保護児童対策地域協議会による支援です。現在、要保護児童1名について、学校・スクールソーシャルワーカー・NPOが関わって、支援を続け

ているところです。

四つ目は、スクールカウンセラーの活用についてです。児童生徒の心の安定を図るとともに、保護者への子育てのアドバイスが、児童生徒の登校につながっていると考えられます。

五つ目は、スクールソーシャルワーカーの活用についてです。家庭訪問を通して児童生徒や保護者の支援をしています。学校や教職員の相談にも応じています。今後は、スクールソーシャルワーカーが中心となって、学校・関係機関と連携して、不登校児童生徒のアセスメント、つまり見立てを行い、支援計画を立て、実施していくこととなります。

次に、今後の不登校児童生徒への支援の充実に向けて、ということで、4点あります。

一つ目は、不登校児童生徒への支援を目的とした、教育関係機関と福祉関係機関との連携・協働による不登校児童生徒支援体制の構築が必要であると考えます。紋別市の不登校児童生徒の数が多く、内閣府の調査では、ひきこもり状態になったきっかけのうち、学校での不登校が約1割となっていることなどから、情報を共有し、効果的な支援ができるようにすることが大事です。

二つ目は、教員の資質向上です。不登校の要因に、学業不振やコミュニケーションに課題があることなどから、生徒指導・教育相談の研修の充実を図り、不登校に関する知識や理解を身に付けさせることや、カウンセリング能力の育成を図ることが必要です。

三つ目は、児童生徒の学習状況に応じた指導や配慮です。TTや習熟度別指導など、指導方法の工夫・改善を図り、個に応じた指導を充実させることが重要です。

四つ目は、スクールカウンセラーの効果的な活用です。カウンセリングを希望する児童生徒・保護者が増えています。学校によっては、1回にカウンセリングする人数が制限されたり、スクールカウンセラーと学校とが相談する時間が十分確保されていなかったりなどの状況があります。スクールカウンセラーの常駐化や、現在の1名から2名への体制にするなど、相談体制を充実させることが必要であると考えます。

以上で、説明を終わります。

○仲条学務課長

次に、適応指導教室、通称「ふれあい教室」の現状につきまして、榎本適応指導教室指導員に説明いただきます。

○榎本適応指導教室指導員

適応指導教室の指導員になりまして、3年目になります榎本と申します。よろしくお願ひします。

現在在籍しているのは、9名です。内訳は、小学校6年生が1人、中学校2年生が7人、中学校3年生が1人です。中学校2年生というのが、中学校入学のときに、ちょうどコロナの休校でスタートした学年で、この人数は、ここ数年で一番多いと思っております。今までの在籍者数は、今年度は9名ですが、昨年は10名おりました。一昨年は7名、その前の年は13名いました。年度の終わりになると、中学校3年生が抜けて、また、新たに増えてきますが、2学期からが多いです。今年も7名でスタートしたのですが、1名、学校に通えるようになって抜けて、1学期の終わりから2学期にかけて3名増えて、現在9名となっております。ひとり親家庭が非常に多くて、9名のうち5名がひとり親家庭です。それから、不登校の原因については、どうして学校に行けなくなったのか聞いてみても、首をかしげる方が多いです。コミュニケーションや人と関わるのが苦手、人がたくさんいるところで活動するのが苦手、特に何かきっかけというよりは、もやもやとしたコミュニケーションの苦手感が見て取れます。

適応指導教室で、どのような活動をしているのかですが、学習、運動、体験活動などとなっておりますが、主に、一人一人の状況に応じて対応しております。具体的には、今、通ってきている人は実質4人ですが、そのうちの3人は、主に勉強をしています。勉強の遅れが気になるようで、自分で問題集を持ってきたり、学校からもらったプリントを持ってきたり、学校で使っているワークブックを持ってきたり、気が落ち着くのか、漢字の練習をしたりしている子も多いです。それ以外には、トランプをする子、トイレに籠もってしまう子もいます。ふれあい教室で、ほぼマンツーマンであるのにもかかわらず、そこにいられなくなって、一人の空間にいたくて、トイレに籠もってしまう子もいますし、上着を頭からかぶり、ミノムシのようになってしまう子もいます。それでも頑張ってきているので、私は、認めるようにしています。否定しないようにしています。そして、自分から話をしない子が多いですが、なるべく当たり障りのないこと、本人が攻撃されたと思われないような言葉で話しかけるようにしています。例えば、オリンピック開催中であれば、オリンピックの話題や台風でこんな被害が出ている、「今日は月食だよ。」というような話、進路に関わる話、将来に漠然とした不安を抱えていると思われるので、こんな学校もあるよ、今までふれあい教室に来た子で、こういった学校に行った子もいるよ、というような話、コミュニケーションを取る仕事もあるし、コミュニケーションがメインではなくて、黙々とやる仕事だつてあるよと。そういうような将来の選択肢の一つとしての資料提供をするようにしています。そのほかには、本人が来て良かったと思ってもらえるような活動をいろいろ取り入れております。私は、家庭教師ではないので、勉強をマンツーマ

ンで教えることはしていません。それよりも集団の中に戻してあげる、学校、中学校卒業後に社会の中で生活していける子どもを育てていきたいと考えております。中学校を卒業したらふれあい教室から離れることとなります。家でも学校でもない場所としてのふれあい教室、本人の居場所としてのふれあい教室を考えているのですが、中学校を卒業してしまうと、中学校とふれあい教室のどちらもなくなってしまいますので、中学校を卒業した後の居場所を考える手立て、お手伝いをしたいと考えていて、本人や私一人で考えても難しいので、学校とうまく連携を取り合って、学校や保護者と同じ方向を向いて子どもに対応していきたいと思っています。学校と情報を共有していきたいと思ってやっておりますが、ふれあい教室では、10時から3時までが生徒が来る時間となっていて、3時を過ぎると、私のところからは子どもがいなくなりますが、学校は放課後、ものすごく忙しいのです。そういうことで、先生たちと連絡が取りづらい、私も一人でふれあい教室をやっているため、私が教室を離れて学校に行くのも難しく、学校とうまくつながっていききたいのですが、そういったところでうまくいかない部分もあります。

私もずっと教員をやっていて、「ふれあい教室」があるのは知っておりました。不登校の子が行くところだというのは、知っておりましたが、意外とどのようなことをやっているのかは、よく分からないことが多くて、今、小中学校の先生たちも、不登校だから「ふれあい教室」ということは分かるけれど、では、ふれあい教室は、どういう所なのか、もう少し、学校とつながって周知していければと考えています。学校と保護者と同じ方向を向いて情報共有できればと、それが課題だと考えております。

○仲条学務課長

次に、カウンセリングの現状や課題について、尾崎スクールソーシャルワーカーに説明いただきます。また本日は、今日から勤務していただくことになりました内田ソーシャルワーカーにも同席いただいております。それでは、尾崎スクールソーシャルワーカーよろしくお願いいたします。

○尾崎スクールソーシャルワーカー

スクールソーシャルワーカーの尾崎です。昨年4月に拝命を受けて、1年と8か月活動して参りました。

本年度は、各学校に定期的にお邪魔することができて、職員室や保健室などに入り込ませていただいて先生たちともお話しし、情報をいただき必要な支援にあたらせてもらうこともできました。学校や先生、個人からの相談は、トータルしますと20件にも上りますが、実は、児童生徒本人に直接お会いできているのは半数にも満たない状況です。

私は、スクールソーシャルワーカーの「つなぐ」役割を担いたいと思い、福祉事業者や支援機関などとも顔を出すようにしていますが、今後もこの役割を大切に、各機関との連携の懸け橋になりたいと考えています。また現在、継続して面談している生徒は少し増えて4名となりました。家庭訪問を実施している件数もあります。時々、教職員の皆さんからもお声かけいただき、相談にあたることもあります。なかなか、児童生徒や保護者、教職員など、一人一人に対し細やかに丁寧には対応できていないと感じています。反省しております。児童生徒に対しては、それぞれの課題をしっかりと抽出して、その上で支援の方向を見定めて、学校内の先生やスクールカウンセラーの先生、ご家庭との同じ方向を向いた支援体制を構築していくべきと考えます。実施できていないことを反省しつつお詫び申し上げたいと思います。

ただ今、週1回の活動となっておりますが、なかなか、週1回では限りがありもどかしいと感じています。スクールソーシャルワーカーは、先ほど紹介がありましたとおり、本年度の残りを本日同席している内田ソーシャルワーカーと複数体制を取ることになりました。私自身も可能な限り活動日を増やし、今まではかなわなかった学校における不登校対策委員会などにも参加させていただきつつ、スクールソーシャルワーカーとして担うべき役割を、今後、しっかりと果たしていきたいと考えているところです。

○仲条学務課長

次に、紋別市のカウンセリングの現状や連携等の課題について、寺崎スクールカウンセラーに説明いただきます。

○寺崎スクールカウンセラー(遠隔システムによる参加)

私、寺崎真一郎と申します。よろしくお願ひします。スクールカウンセラーは、今年で8年目か9年目になるのですが、紋別市の方では、5・6年目ぐらい関わらせていただいています。途中で中学校だけという時期もありましたが、今は、小学校も中学校も回らせていただいています。相談件数については、年度によってバラバラですが、ここ数年、紋別地区の方がすごく多くなっていて、お子さんからの相談がとても増えていて、今、紋別市全体で25名程度の継続ケースがあります。スクールカウンセリングというのは、いろいろありまして、私が勉強している親ガイダンスというようなカウンセリングのアプローチがありますが、保護者に会って不登校のお子さんにとどのように関わっていけばいいのかということをお母さんやお父さんと一緒にお話しをするという部分があるので、その部分については、スクールソーシャルワーカーの先生とも重なる部分もあると思うのですが、私としては、いい形で連携・協働していければなと思っています。

課題としては、時間数のことがありまして、尾崎スクールソーシャルワーカーから週2回という話もありましたが、私は、週1回も行けていなくて、うらやましいと思っていたのですが、多くても月に3回、2回という形で、すべての学校を回るという形になると、ほとんど行けない学校もあり、気になってもなかなか行けない、子どもにも会えないという状況があって、子どもたちと次が約束できないのは苦しいのですよね。次は、いつに会えますかと言えると、子どもたちも次までに頑張ろうとか、次までにこうしてみようということができ、宿題を出すようなカウンセリング、アプローチも使えるのですが、それを使えないというのもありますし、その辺が難しいと思います。それから、教頭先生もすごく大変ではないかと思っています。マネジメントの部分でも、大変だと思っていて、保護者や子どもとも、なるべく授業に重ならないような形を考えると結構、時間数も限られてしまうので、子どもと会うのが15分という時もあったのですよね。会って15分話して、何ができるのだろうと思いつつながら、その中で何かをしなくてはいけないと思いつつながら、関わっていくのですが、もう少し時間があればいいなと思っています。この数年の一つの課題だったのが、学校の先生に対してのフィードバック、カウンセリングを行った後の情報共有の時間については、委員会もかなり積極的に関わってくれていて、そこは今年改善された部分ではないかなと思っています。そこは、本当に感謝しております。

○仲条学務課長

最後に、中高生のためのオープンスペース UTRILLO は、不登校児童生徒のためではなく、こどもの第3のスペースとして開設しているところでありまして、利用者には不登校や不登校の経験者もいると伺っております。

UTRILLOの現状や課題について、大橋ひかるさんより説明いただきます。

○中高生のためのオープンスペース UTRILLO 大橋氏

UTRILLOの大橋と申します。よろしく申し上げます。

今ご紹介いただいたとおり、UTRILLOは、本年度から市内の中高生のための居場所として開設しました。現状は、4月にオープンしてから今までで、市内の中高生90名ぐらいが利用しています。そのうち、私が把握しているだけでも、約1割が不登校や不登校経験者です。市内の中高生が、休日や放課後の時間を好きなように過ごせるよう、居場所として設置した施設なのですが、そういった家庭や学校以外の場所という特性もあって、子どもや保護者からの相談も増えています。

今は、保護者から相談を受けて、学校のある時間帯にこちらに通うことを検討している子どももいます。また、榎本先生からの紹介で、中学校時代に不登校を

経験していて、通信制高校に進学後の勉強する場所、人と関わる時間を作るという目的で、通っている子もいて、家にとじこもりがちな子どもがまず外出する場としての需要が増えていると感じています。

子どもたちの UTRILLO での過ごし方としては、こちらから具体的にこういうことをしよう、勉強しようなどということは一切ないので、自分たちが来たい日に、やりたいことをやりに来るという感じで、宿題を持ってくる子、友達と話をしにくる子、ボードゲームで遊ぶ子もいます。

課題としては、保護者の方や不登校の保護者からの相談を受けることも多くなってきたので、その対応が課題と考えています。話を聞くと保護者や子どもたち自身も、相談するところが分からない、相談先がないと皆さんから伺っていて、かつ内容も、進学のことや生活のことなど、一人一人違うので、相談を受けた後に、UTRILLO としてそれをどの機関につなげていくのかを判断していくのが、今後、必要とされると考えています。あとは、今後も UTRILLO が、子どもが相談しやすい環境で有り続けることと、保護者同士、関係機関との情報交換の場を作っていくことが課題です。

○仲条学務課長

それでは、これより質疑応答の時間を取りたいと思います。何かございませんでしょうか。

○上林委員

ふれあい教室について、先ほど学校とのつながりがあまりないという話がありました。ということは、担任の先生もそこに行っているかどうか分からないということなののでしょうか。

○榎本適応指導教室指導員

それは分かっています。ふれあい教室には学校を通して申し込むことになっていて、担任の先生からの個人調査書も出ていますし、私の方からも、毎月、一か月分の様子、登校日などを電話や文書でやり取りしています。1か月に1回は必ず報告や連絡をしています。

○上林委員

その上で、担任の先生から何かありますか。

○榎本適応指導教室指導員

先生によります。「あっ、そうですか。」で終わってしまう場合もありますし、

「学校ではこうでした。」、「家庭訪問に行ったときにはこうでした。」というように、情報をくれる方もおります。

○上林委員

それは、榎本先生から見て、学校とうまくコミュニケーションが取れていると判断できますか。

○榎本適応指導教室指導員

それは、人によります。うまく連絡が取れない方もおります。こちらから働きかけなくとも、どんどん情報をくださる方もおりますし、いろいろです。

○上林委員

ありがとうございます。

○堀籠教育長

教育長の堀籠です。ぜひ、皆さんにお聞きしたいと思っただのですが、不登校が多くなるのが問題だと思っっていますが、もし、学校に行くぐらいだったら死んでしまいたい。自殺ですね。自殺を止める最後の安全面が、もしかしたら不登校なのかもしれないということを考えてことがあります。それぞれの不登校の保護者や子どもに接して、自殺の心配などを感じられたことがあるのか、それぞれ皆さんにお聞きしたいと思います。

○榎本適応指導教室指導員

一人、申し込みはしたけれど、ふれあい教室には一日も通級できていない、学校にも行けていないお子さんがいて、家では死にたいと言っているとの話は聞いたことがあります。通級しているお子さんについては、そのような様子はありません。

○尾崎スクールソーシャルワーカー

私が継続的に面談している生徒さんは、自殺企図があると聞いています。私が話をする中では、そういった心の動き感じることはありません。実際、リストカットをした経験がある人は1件あります。

○中高生のためのオープンスペース UTRILLO 大橋氏

UTRILLO に来ている子では、本年中、自殺企図を自分から発信、助けてほしいというのを発信して、こちらでも関係機関や専門機関につなげる例もありました。

○寺崎スクールカウンセラー(遠隔システムによる参加)

私のところは、かなり多いですね。この2年は、かなり多いなという印象があります。コロナになってから、やはり多いです。毎回、面接やカウンセリングではドキドキするようなこともあり、不登校という最後の歯止めという部分も確かにあります。

○堀籠教育長

ありがとうございました。

○仲条学務課長

ほかにご質問等ございませんか。

○宮川市長

先ほど、学校の不登校対策委員会の話がありましたが、これはどういうメンバーで、どのようにやっているものなのか教えてください。

○尾崎スクールソーシャルワーカー

実際には出席していないので、どういったものなのか分かりませんが、学校によって設置している学校があります。後藤先生、ご存じでしょうか。お話ししていただけますか。

○後藤教育支援アドバイザー

管理職と生徒指導担当、担任や関係する教員などのメンバーで構成し、現状と今後の短中長期目標や支援・対策などを協議し、実施・評価・改善しながら不登校の解決に当たる組織です。

○宮川市長

そことの連携がないと、学校がどのような対策をしているのか分からないと、情報共有がされないとだめですね。

○尾崎スクールソーシャルワーカー

クラスに不登校の生徒がいらっしゃると、担任の先生が苦しむし、思い悩むと思うのですよね。そこを孤立させてはいけないと思って、学校全体で支援していかなくてはならないと思うのですよ。その必要性をすごく感じますので、私も参加させていただいて、どのような状況なのか見せていただきたいと常々お願いし

ているところです。やっているところもありますし、報告も受けています。

○後藤教育支援アドバイザー

以前は、担任一人に負担をかけるということが見受けられたのですが、今は、学校全体としてチームで対応するようになっていきます。学校を訪問した際に、どのように支援していくのかについて話し合います。しかし、十分な時間が取れない状況です。先ほどお話ししたとおり、これからは一人ずつ、しっかりアセスメントをして、支援計画を立てていかなければ、なかなか、不登校の解消につながらないと思います。アセスメントがとても大事ですので、その部分に、スクールソーシャルワーカーに関わっていただくことが重要だと考えています。

○宮川市長

話を聞くと、圧倒的にマンパワーの不足というか、それぞれが時間を取れないということになると、もっと関係する方々を積極的に増やしていけるような対策をしないと、なかなか、実際には厳しいという印象を受けました。驚くべき数字なので。これを減らしていくためには、体制を充実させていかないと、難しいと感じております。

○尾崎スクールソーシャルワーカー

確かに、私もそうですし、カウンセラーの先生も忙しいというか、数のところの不足もあるのですが、寺崎先生、先日の話で、数ではないという言葉がありました。数も必要だと思いますが、寺崎先生が数ではないと話したことが印象的だったのですが、感じられるところがありましたらよろしくお願いします。

○寺崎スクールカウンセラー(遠隔システムによる参加)

ただ、単純にこういう事って、ソーシャルワーカーの尾崎さんや私の回数を増やせばいいのかということ、それで解決できないことも多いと思います。それこそ、先ほど話があった連携という部分もそうですし、連携では、先ほどの不登校対策委員会に入れてもらえれば、それが連携なのかという訳ではなくて、その中で、どれだけ信頼関係が築けるかということや、学校がスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーをどのように活用できるのかということなど、目に見えない部分が多いと思います。もう一つは、学校の先生たちへの不登校に対する考え方が大きく、私もここ数年、すごく消耗しているのは、話が通じたりするような先生がいなくなり、力のある先生たちがどんどんいなくなってしまうと、また最初からスタートしなければならないことが多いので、学校の先生たちは学校に通わせなければと考えている方が多いので、来ないと指導できないという先生

も多いですが、不登校の問題というのは、基本的に、学校に行かせる、行かせない次元で考えるとうまくいかないというのは、研究でも言われていて、そこをしっかりと各専門家と紋別のいろいろな方々と共有しながら、不登校についてどのように考えていくのかということを考えていくことが必要ではないかと話でした。

○宮川市長

後藤アドバイザーの資料の中に、教員の質向上、生徒指導や教育相談の専門的な研修を受けさせる必要があると書かれていますが、この部分については、教育委員会ではどのように進めていかなければならないと考えていますか。

○堀籠教育長

各学校も不登校に対しての対策というのは、各教員の力量ということが必要で、明日も潮見小学校で行われるのですが、不登校対策の研修は、各学校でも盛んに行われています。やはり、経験などが効いてくるところでありますので、先ほども話がありましたが、先生の異動もありまして、なかなか、継続的にカウンセリングの能力を保つというのは、ずっと努力していかなければならないなと考えているところです。

○竹本企画調整課長

市の企画調整課長の竹本と申します。本日はありがとうございます。

実は、今は企画調整課長ですが、平成23年度から4年間、教育委員会におりまして、学務係長をやっていたのですが、その当時は、ふれあい教室しかなくて、年に多くて3人ぐらい児童生徒が通っていました。

私がいる間に、スクールカウンセラーを配置できたのですが、ふれあい教室に関わっていた時に感じたことが2点ありました。

一つ目は、ふれあい教室に通級を始める時に、保護者の方も一緒に面談で来ていただくことが多くて、そこには私や担任の先生も同席することがありました。まず、保護者の方も自分のお子さんの状況をあまり把握できていませんでした。なぜ、不登校になっているのか、どうしたらいいのかということあまり理解できていなくて、当然、子どもとのコミュニケーションも十分でなくて、こちらへの受け答えもあまりなかったというのが1点あります。

もう一つは、本日、担任の先生とのコミュニケーションというのがありましたが、学校も不登校で学校に来ないので、ふれあい教室に手続きをして終了になってしまっているということが2点目として感じていました。

その当時は、ふれあい教室しかなかったのですが、後のフォローアップというのがなかなかできていなかったのですが、今、ニーズや時間の限界があるのかもしれ

ませんが、以前と比べたらスクールカウンセラーもいて、ソーシャルワーカーもいて、それをバックアップ、サポートできる居場所があるので、先ほど寺崎先生からご回答いただいたのと全く一緒ですが、今ある体制、市でいかにまわすというか、全体で支えていくということ、今、ようやくできる体制になってきているのではないかと、当時の経験者の一人として感じているので、今後、人数の部分もあるかもしれませんが、今の体制で、できる連携が動いていけば、紋別市として、その当時に比べて、はるかに体制が整いつつあるのかなと感じました。

○仲条学務課長

今、連携の部分で話が出たのですが、教育委員会の方で、各先生にはそれぞれ担当して一生懸命やっただいていただいているのですが、やはり、情報共有と連携の部分は必要だということで、先日から教育ケース会議というものを開いておりました、スクールソーシャルワーカーや榎本指導員、後藤アドバイザーにも入っていただいて、月1回ですが情報共有と連携して、子どもたちにどのように問題ケースを解決したらいいのか、導きですね、方針を決めてフィードバックできるということで、子どももそうですが、学校にフィードバックできるので、そういった体制を取れるように取り組んでいるところでございます。

○宮川市長

あと、親もこういう関係で無関心というの、どれぐらいいるのでしょうか。兄弟で不登校になっている家庭もありますが、兄弟とも学校に行かないなど、ひとり親にしても、関わってもらうこと自体が迷惑となっている、そういう意識なのではないでしょうか。

○後藤教育支援アドバイザー

一件、一件、状況は違います。親自体も不登校を経験している例が何件かあります。ですから、子どもが学校に行きたくないと言え、行きたくなかったら行かなくてもいいよ、という親も何件かおられます。仕事が忙しくて、なかなか学校とつながりを持ってない、学校からの電話も受け取らない、学校への欠席連絡をしない親もいます。そこをしつこく、学校が連絡するようお願いすると、ますます、学校から離れ、逆に不信感を持たれてしまいます。担任と親との関係が悪くなってしまって、つながりが持てなくなる状況になります。ただし、一生懸命登校させたいと思って頑張っている親もおられます。つながりが保っていれば、粘り強く取り組む中で、次第に親が子どもの不登校について、何とかしなくてはならない気持ちになり、登校させなければならぬという気持ちになって、そういうところが出てくるようになれば、登校に向けてどうしましょうかと学校と家庭が相談

することによって、だんだん改善されていくと思います。

○内田ソーシャルワーカー

初日ですが、話していいですか。今日からお世話になりますスクールソーシャルワーカーの内田と申します。

北見市では、スクールカウンセラーをしております。私、精神科のソーシャルワーカーを長年やっております、お母さん、お父さんが病気やトラウマ体験を持ちながら子育てをしている人たちの応援をしてきた側にいました。

いろいろな苦労がある家庭の中で育ったお父さんやお母さんの子どもは、不登校になっていくケースが良くあります。そういったケースでは、学校の方からはプレッシャーみたいなものをかけられていることがあります。先ほど、後藤先生がおっしゃっていたように、宿題をやらせてくださいとか、連絡をはっきりしてくれとか、それはそれで、お母さんたちも苦労しているという。お母さんやお父さんが、いろいろな育て方、ソーシャルワーカーの視点で、3世代前まで遡って見るのが基本だったりするのですが、お父さんお母さんが、おじいちゃんやおばあちゃんたちに愛されて育ったかどうかとか、そういうところから探っていかなければならない作業が結構あると思っていて、お母さんたち、お父さんたちが、回復していくと、子どもたちが元気になっていって、お父さんとお母さんの心配をしなくていいと思って学校に行くケースがかなりあります。

不登校になっているケースというのは、非常に境界線があいまいな家はかなりあって、お父さんの苦労なのか、お母さんの苦労なのか、自分の苦労なのかが分からないみたいな。毛玉状態になっているような、そういうケースが非常に多いというのが、私が関わってきた中では多かったですね。私は、お母さんたち、お父さんたちがケアを受けられればというもの、やはり、どこかに作っていかねばならないと思っていて、紋別市で何かできればいいなと思っています。親の回復に対するプログラムについては、結構勉強をしてきたので、その辺のこととか、苦労を別にしてあげるとか、これはお父さんとお母さんの課題だから、あなたたちは心配しないで学校に行っていよいよという感覚、そういった物も少し広げていきたいと思っています。

○中高生のためのオープンスペース UTRILLO 大橋氏

内田ソーシャルワーカーの意見を受けてですが、今市内のNPOと協力しながら、不登校の子を抱える保護者の会というのを月に1回、UTRILLOで行っています。不登校の子どもを抱えていた経験者のある保護者の方から、現在、不登校の子を抱えている保護者の方に、「うちの子はこういうところで苦労したよ。」とか、「うちの子はこういった対応をしたよ。」と、伝えていくという目的で、定期的

に集まっています。経験者の方々も、現在、不登校の子を抱えている方も、共通している悩みは、学校との連携です。後藤先生がおっしゃった保護者の無関心という話にもつながりますが、私が考えるに、保護者は無関心ではなく、子どもが学校に行かなくなった最初の段階で相談した担任の先生とのやり取りで、もうこの人には相談したくない、できない、分かってくれないと判断してしまっているのだと思います。子ども自身も、担任の先生に、勉強のことや友人関係のことを相談したときに、信用できない、今後は相談できないと思ったら、もうそれ以降は全部シャットアウトになります。子どもや保護者からするとそこからスクールカウンセラーの方、スクールソーシャルワーカーの方に相談する方法はなかなか分かりにくいので、担任の先生とのコミュニケーションがだめだったら、「学校には頼れない、学校には頼れないから自分たちで何とかしていこう。」と考えますし、「無理をさせるくらいなら学校には行かなくてもいい。」と判断すると思います。

学校に行かないという選択肢は、私はいいと考えていて、その子が本当に望んでいなければ、強いる必要もないと思うのですが、例えば、子ども自身に学校に行きたいという気持ちが出てきて、親がそれをサポートしたい場合に、担任の先生とシャットアウトされていってしまうのは残念なことですし、逆に、その子の精神状態としては、学校に行かない方が絶対にいいと判断した場合は、その子の学習面や、将来をどのように支えていくのかというところまで、考えていかなければならないと思います。不登校の問題はケースバイケースで、本当に一人一人全く違うのですが、大きく分けてその2つの方向は、サポートしていく体制が必要だと私は思います。

○仲条学務課長

そのほか、ご質問はよろしいでしょうか。以上で、質疑応答を終わります。ここで、現場で対応されている先生方には、ご退席いただきます。本日はありがとうございました。

以上をもちまして、協議事項（1）不登校についての説明を終わります。

○宮川市長

今、説明がありました。ご意見や感じたことがございましたら、お願いします。

○小林委員

いろいろ話を聞きましたが、私が小学校や中学校の時には、不登校というのは記憶にありません。

例えば、弁当を持ってこないから、弁当のおかずが恥ずかしいから、学校に行かないという、そういった動機がありました。今は、複雑な状況ですよね。それぞれの家庭もそうですし。学校の対応も先ほど話がでていましたが、あります。私は、学校関係者が努力をして成果を上げていることは、結構あると思います。そこで、不登校の児童生徒というのは、不登校の子は、ほとんど家庭にいますよね。その家庭の中で充実しているか。大事なことですよね。親子で共通の話題があったり、笑いがあったり、そういうことを少しずつ減らしていくことによって、登校につながるのではないかと思いますので、先ほど、親の教育などと言われていましたが、家庭内ほど、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーが、親との関わりを持っていきますと言っておりましたので、そういったところを、これからしっかり開拓していけばいいのではと思いました。

○上林委員

一番気になったのが UTRILLO です。先ほどからお話を聞いていたら、拒絶する子どもは、学校の匂いと先生の匂いがするだけで拒絶反応を示すような子どもが多いと思います。その子どもたちが唯一行くのが UTRILLO のようなところなので、今後、ここが本当はそうあってほしくないのですが、どんどん増えて行く可能性が高いと思うので、教育委員会として何かしらの支援、協力をしていくような方向性で、考えていった方がいいと思います。例えば、図書館との連携など。その後も、できることから少しずつ協力できるような支援体制を作っていけばいいなと思いますし、もう一つは、その子どもたちの相互のコミュニケーションのようなものもこれから必要になっていくのではないかと思いますし、その中に、教育委員会が進んで関わっていくのが一番必要になっていくような感じがしました。

○渡邊委員

今まで、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの話を聞いていて、確かに子どもをサポートするのは大事ですけど、その環境がある保護者の教育、そういうサポートの方が大事じゃないのかなと少し思いました。自分が思うには、保護者のサポートを重点的にやっていく方が、やはり、家庭環境が大事だと思います。子どもが、そういった不安を持たない、無気力というのを改善できる糸口があるのではないかと。合わせてサポートしていく必要はあると思います。家庭にも原因があるのではないかと思います。見ていると、片親であることもあり、介入することは難しいですが、それをどうやったらサポートできるのか。例えば、市町村をまたいで、他の教育委員会はどうかかなと。連携は取れないのかと思いました。どこでも同じ問題を抱えていると思いますので、難しいことも

あると思いますが、そういったところで、連携や情報交換、情報共有ができないものなのかと思いました。

○古屋委員

私も、やはり、保護者のサポートが一番大事なのかなと思います。学校とはコミュニケーションで、だんだん変わっていくのではないかと1番に思いました。

○堀籠教育長

今日は非常に、現場の方の話を聞けたので、教育委員会としてもこれから不登校にどう取り組むかというのは、いろいろ情報を聞かせていただいて、これからたくさんやらなくてはならないことがあると思ったところです。

総合教育会議として、一つご提案をお願いしたいのですが、今回は具体的な案件に関わるということが心配されたので非公開でやりましたが、議事録は厳選したうえで公開ということをお願いできないでしょうか。こうしたことを市としても、課題に思っていて、それぞれの専門家もということがあるので、今日発言いただいた方には議事録として確認した上で、公開をしてはいかがかと、ご提案をしたいと思います。

○宮川市長

については、いかがですか。

○小林委員

今日の話の中には、プライベートな話もなかったのでよろしいのではないのでしょうか。

○宮川市長

議事録の公開について、よろしいですか。

○各委員

了承

○堀籠教育長

紋別市でも不登校の問題を取り組んでいくという発信にもなると思いますので、ぜひ、議事録の公開ということを了承いただければと思います。

○宮川市長

以上で、よろしいでしょうか。

○各委員

了承

○宮川市長

今日は、現場の方々の話を聞いて、そこをプロジェクトチームにして学校とつながっていれば、成果が出る第一歩ではないかというような気がしました。

また、小林委員が昔は不登校がなかったと話していましたが、そのときは、やはり、先生を頼っていたと思います。児童生徒も家庭の親も、先生を第一に頼る、それは今も変わらないのではと。そのときの対応というのは、すごく重要なので、そういう部分で、やはり、教職員の力量をアップさせていかないと、最初のところでつまずいてしまうような気がします。それだけ、受け入れできるような形になっていかないと厳しいのかなと。それが、学校の役割だということだと思いません。

今は、昔では考えられないスタッフを配置して対応していますが、こうして現実的に不登校が更に増えているというのは、社会的にいろいろな背景があると思いますし、そこを充実させて対応していかないと難しい時代になってきていると思いますので、大変いい会議だったと思います。

そのほかなければ、以上で協議を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

午後 4 時 12 分終了